

## 中学校・高等学校国語教材としての

### 熊本藩儒秋山玉山の漢詩

―「太宰府謁萱公祠」二首を例として―

中 尾 健 一 郎

#### はじめに

平成二二年（二〇一〇）六月に「学習指導要領」が改訂されてから、十年の節目を迎え、新しい「学習指導要領」が二〇二〇年より施行される。ところで、現行の「学習指導要領」において設けられている高等学校国語古典Bには、「教材には日本漢文を含めること」が定められ、実際に教材として頼山陽「泊天草洋」、同「題不識庵擊機山図」、広瀬淡窓「桂林莊雜詠」などが取り上げられている。筆者は近年、九州地区の漢詩人の作品を教材化できないかと考え、その初歩的な取り組みとして、熊本大学教育学部および同大学院教育学研究科の学生たちと、熊本藩にゆかりのある秋山玉山や藪孤山の漢詩を教材として扱った。その際に知ったのは、熊本県出身の学生であっても、秋山玉山と藪孤山がそれぞれ藩校時習館の初代教授と二代教授であったことはおろか、その名前すら聞いたことがないという事実であった。そこで専門教育の授業では、できるだけ藩校時習館の存在と玉山・孤山の二教授にふれるようにしているのだが、如何せん、数回聞いた程度では知識として定着させることは難しい。そもそも学生たちが熊本を代表する江戸時代の知識人について殆ど知らないのは、大学入学以前に熊本の漢詩人の作品に接する機会が殆どなかったからだと考えられる。

そこで、まず地域の文化人の漢詩を教材化することを試みようと思う。本学の授業では、藪孤山が浦島太郎のことを詠んだ「浦郎行」（『孤山先生遺稿』巻一）を教材として扱ったことがあるが、やや長めの古詩は中学校の教材としては適さないで、今回は秋山玉山「太宰府謁萱公祠」二首のうち、第一首を中学校国語あるいは高等学校国語総合の教材と想定し、第一首と関連させて第二首を高等学校古典Bの教材と想定して考えたい。

#### 一 「太宰府謁萱公祠」第一首

秋山玉山（一七〇二―一七六四）、名は定政、あるいは儀。字は子羽。通称は儀右衛門、豊後の人。本姓は中村であるが、叔父で熊本藩の儒医であった秋山需庵の養子となった。肥後熊本藩儒。作品集に『玉山先生詩集』（宝暦四年刊）、『玉山先生遺稿』（安永三年刊）がある。水足屏山に入門し、江戸に遊学して昌平黌にて林鳳岡に教えを受けた。帰藩後、賢君細川重賢に藩校時習館の創立を進言し、受け入れられて初代教授に就任した。林鳳岡の門下であるが、作風は荻生徂徠の古文辞派の流れを承け、漢魏詩、盛唐詩を模範とした。今回取り上げる五律二首は、製作年代は不明だが、玉山の江戸遊学の前後か、あるいは藩主の参勤交代に随行した際、太宰府に立ち寄っての作ではないかと考えられる。なお江戸時代の大坂の商人、高木善助（一七八七―一八五四）は、大坂と薩摩の間を旅行した『薩陽往返記事』に、文政十一年（一八二八）十一月二十五日に太宰府で天満宮・都府楼・観世音寺等に参観したことを記しており、時代はやや下るものの熊本から江戸・上方へ向かう場合、長崎街道に入ると筑前山家宿から筑前内野宿へ向かう途中に太宰府方面への参詣道があり、天満宮に寄ることができたことが窺われる。玉山も同様のルートで太宰府を訪問したのであろう。

それでは、玉山の五律「太宰府謁萱公祠（太宰府にて萱公の祠に謁す）」の第一首から見よう。なお玉山の詩の本文は、『玉山先生詩集』巻三（『詩集日本漢詩』第五卷所収、汲古書院、一九八五年）による。

##### 太宰府謁萱公祠 二首 其一

太宰府にて萱公の祠に謁す二首 其の一

悠悠八百載 悠悠たり 八百載

陳迹徒悲傷 陳迹 徒に悲傷す

都府楼何処 都府楼 何れの処ぞ

観音寺已荒 観音寺 已に荒る

魂猶吟沢畔 魂は猶ほ沢畔に吟ずるがごとし

人似貶瀟湘 人は瀟湘に貶せらるるに似たり

唯梅花色 唯だ梅花の色のみ有りて

春風憶帝郷 春風に帝郷を憶ふ

\* 五言律詩。韻字は「傷、荒、湘、郷」

【現代語訳】

1はるかに八百年もの時が流れ  
2菅原道真公が左遷された太宰府の地を訪れると、いたずらに悲しみが湧き  
起る

3公が眺めた都府楼はいずこであろうか

4公が鐘の音を聴いた観世音寺もすっかり寂れている

5公の魂はいまだに庭園の池の傍らで歌を吟じているようだ

6それは昔、中国の屈原が洞庭湖のほとりに追放されたのと似ている

7庭にはただ梅の花が咲いているばかり

8公は春風に吹かれながら、平安京に残してきた梅の花を懐かしんだことであらう

詩題に明らかなように、本詩は玉山が太宰府天満宮に参詣し、祭られている平安時代の詩人菅原道真を偲んで詠んだものである。冒頭の「八百載」は概数であり、道真が太宰権帥として赴任した昌泰四年（九〇一）から玉山在世の十八世紀までおよそ八百年であることをいう。その故地を逍遙して、玉山はもの悲しい気持ちになる。なぜならば旧太宰府政庁跡である都府楼には旧時の面影はなく、観世音寺は寂れてしまっていたからである。ここで詩の領聯に突然、都府楼と観世音寺が対をなして登場するのは、次に掲げる道真の詩を踏まえるゆえである。

不出門

門を出でず

一從謫落就柴扉

一たび謫落せられて柴扉に就きてより

万死兢兢跼踖情

万死兢兢たり 跼踖の情

都府楼纔看瓦色

都府楼は纔かに瓦の色を見る

観音寺只聴鐘声

観音寺は只だ鐘の声を聴く

中懷好逐孤雲去

中懷 好く孤雲を逐ひ去り

外物相逢滿月迎

外物 満月を相逢ひ迎ふ

此地雖身無撿繫

此地 身の撿繫せらるること無しと雖も

何為寸步出門行

何為れぞ寸歩も門を出でて行かん

（菅原道真『菅家後草』、傍点筆者、以下同じ）

これは道真の太宰府時代の漢詩の中ではよく知られているものであり、高

等学校古典Bの教科書に取り上げられることもあるので、特に内容にふれることはしない。白居易の「不出門」（『白氏文集』巻五十七）を拠り所として作られたものであり、領聯は『大鏡』左大臣時平伝にも引用される対句である。玉山も道真のこの詩を当然読んでいたであろうし、該詩の領聯と「太宰府謁菅公祠二首」其の一の領聯の対句が同様の構成を取っているのもそのためであると考えられる。したがって玉山の漢詩において「都府楼」「観音寺」の語を説明する場合は、太宰府市の地図などを使用して天満宮との位置関係を確認するのは当然のことながら、この二つの旧跡が道真の詩に登場することも併せて紹介することが望ましい。

なお江戸時代の太宰府の旧跡については、前出の『薩陽往返記事』に簡略ながら記録がある。東條広光編『大坂商人旅日記 薩陽紀行―文政・天保期の南九州への旅―』（注2を参照）より該当の部分を引用しよう。

右の神宝拝見済みて、程なく大般若転読あり。九つ時帰坊、直さま酒飯を携え、近辺の旧跡巡覧に行く。

南館（菅神御住居、太宰権帥の御館の旧地なり。松林の中に小祠あり。『尼御前』という菅神乳母の神のよし。）

天智帝月見の亭旧跡（南館の北、小高き岡あり。松樹数十株生いたり。是、旧地なり。）

都府楼（月見の亭旧地の南、田畝の中に礎石数十ありて、門・楼・殿閣の跡、千載の昔も歴然として見つべし。）

都府楼の辺、少し北手に孔子聖廟あり。其の辺にて古瓦の奇品を探り得て、輿に乗じ歩をうつして観音寺に到る（古瓦の質、石の如く、叩けばかねの音あり。硯石に佳なり。帰坂して神田氏へ送る。）。梵刹寂寥として老松森然たり。千古の靈仏巍々として列す。又本殿の前、大石の白あり。何等の為にせしや、其の説、分明ならず。土俗は都府楼の砌の石なる紫石を掻きし具なりという、いかかやしらず。恐らくは妄説なるべし。此の寺の方丈にて暫く酒飯を喫し、黄昏の頃より帰坊。湯を浴し酒食を用いて後、夜九つ時休息。

（前掲、東條氏著書、六七―六八頁より。ただし注釈は省略）

高木善助は、文政十一年（一八二八）十一月二十五日に太宰府の旧跡を訪問しており、南館（天満宮）、都府楼の礎石、観世音寺の古仏などを参観して

いる。先述のように、彼は玉山よりもやや後代の人物であるが、玉山が太宰府を訪問した時の当地の状況も善助の時とそれほど大きくは変わらなかったと見られる。そうであれば、玉山が見た江戸中期の都府楼・観世音寺の様子も、善助の文章からそれとなく想像できるのではないか。

ところで、玉山の詩の前半四句は、彼が太宰府に身をおいて往時を思い起こすことを詠んでいるが、後半四句では漢詩の場面が突如として転換し、玉山が幻視したものが描写される。それは太宰権帥の官舎の庭をあてどなく歩きまわる亡き後の道真である。道真の霊魂は庭園に設けられた池のほとりで詩を吟じている。その様子は古の中国の詩人である屈原が洞庭湖（現在の湖南省にある湖）のほとりを幽鬼のように彷徨しているのに似ている。その傍らには梅の花が咲いており、道真の魂は春風に故郷である都に残してきた梅を思い出しているようである。

本詩の頸聯において、道真と戦国楚の屈原が対にされるのは、両者ともに権力闘争に敗れて左遷の憂き目に遭い、失意のうちにみまかったからである。よって玉山の脳裏において、道真は屈原のように忠誠心が厚く、偉大な詩人でありながら、悲劇的な最期を迎えた人物として認識されていたようである。屈原については、高等学校古典Bの散文教材として「漁父辞」が取り上げられるので、これと関連づけて説明することも可能であろう。また尾聯に描かれる「春風」と「梅花」は、道真の次の和歌を意識するはずである。

東風吹かばにはひをこせよ 梅花主なしとて春を忘るな

（『拾遺集』 雑春）。

『大鏡』左大臣時平伝にも見え、「飛梅伝説」によって知られる歌である。玉山がこの歌を意識していたとするならば、彼が幻視した道真の霊が口ずさんでいた詩歌は、「不出門」詩や「東風吹かば」の歌であったとの想像を膨らませることもできよう。いずれにせよ、玉山がこの漢詩を作るに際して、中国や日本の故事と文学の両方面の知識を活用したことは言うまでもない。国語で漢文教材を扱う際に、国語の時間に外国の文学作品を読むことに抵抗を覚える生徒もいるであろう。しかし、玉山の「太宰府謁菅公祠」二首は、我々が何故に国語の時間に中国の古典を学ぶ必要があるかを思い起こさせる。したがって国語を教えるに際して、この漢詩は適当な教材であるといえる。

## 二 「太宰府謁菅公祠」第二首

玉山は「太宰府謁菅公祠」二首の第一首において、天満宮を逍遙する道真の様子を思い描いた。この一首は単独で鑑賞することも可能であるが、第二首と併せ読むことによって作品世界の奥行きが深まる。また、第一首と比べてやや難易度が高いので、高等学校古典Bで扱う教材としてふさわしいと考えられる。続けて第二首を見よう。

### 其二

宰府遺蹤旧

猶思昌泰年

浮雲饒紫海

瞰日訴青天

廟貌千秋肅

詩名万古伝

欲知歳寒操

松色鬱風煙

### 其二

宰府遺蹤旧し

猶ほ思ふ 昌泰の年

浮雲 紫海に饒く

瞰日 青天に訴ふ

廟貌 千秋に肅かなり

詩名 万古に伝ふ

歳寒の操を知らんと欲せば

松色 風煙に鬱たり

\* 五言律詩。韻字は「年、天、伝、煙」

### 【現代語訳】

- 1 太宰府政庁の遺跡はすっかり古びている
- 2 いまも思うのは、やはり菅原道真公が太宰府におわした昌泰の年のこと
- 3 筑紫の海の上には浮き雲が多くかかり
- 4 公は青空を仰いで自らの潔白を訴えた
- 5 天満宮の佇まいは長い年月を経てなお厳かであり
- 6 公の詩人としての名声は、久遠に伝わる
- 7 もしその変わることのない堅い志を知ろうとするなら
- 8 常緑の松の木が、風や霧の中で盛んに青い葉を茂らせているさまを見るとよい（公の君子としての節操も、青松のようであったのだ）

第二首も第一首と同様に前半と後半で内容が分かれるので、四句ずつに分けて解説したい。首聯では太宰府の遺跡を目にした玉山が、道真が太宰府に左遷された昌泰四年（九〇一）の頃を回想する（昌泰四年の翌年は延喜元年）。玉山は第三句に、当時「筑紫の海の上には浮き雲が多くかか」っていたと述



べるが、これは『文選』所収の漢詩を踏まえた表現である。高等学校古典Bに採用されることのある「古詩十九首」第二首（「行行重行行」、『文選』卷二十九）に、「浮雲蔽白日、遊子不顧返」（浮雲白日を蔽ひ、遊子顧返せず）とあり、唐・李善の注釈に「浮雲之蔽白日、以喻邪佞之毀忠良。故遊子之行、不顧返也」（浮雲の白日を蔽ふとは、以て邪佞の忠良を毀るを喩ふ。故に遊子の行きて、顧返せざるなり）と述べられている。玉山は当然『文選』は読んでいたであろうから、彼が李善の注釈によつて解釈したとすれば、「浮雲」は道真を諷言した勢力、つまり藤原時平一派の比喩であろう。第四句はさらに難解である。「皦日」は光り輝く太陽のことであり、『詩経』王風・大車の「謂予不信、有如皦日」（予を信ならずと謂はば、皦日の如き有らん）を踏まえて、道真自身の身の潔白をいう。「青天に訴ふ」とは、李白の「白頭吟」（錦水東流碧）（『李太白文集』卷四）に「長吁不整綠雲鬢、仰訴青天哀怨深」（長く吁きて緑雲の鬢を整へず、仰ぎて青天に訴へ哀怨深し）にそのまま見えるが、ここでは李白の詩と共に次に挙げる道真の五絶を意識するであろう。

#### 自詠 自ら詠ず

離家三四月 家を離ること 三四月

落涙百千行 落つる涙は 百千行

万事皆昨夢 万事 皆夢の如し

時時仰彼蒼 時時 彼の蒼を仰ぐ

（菅原道真『菅家後草』）

この詩は昌泰四年の作で、道真の題注に「自此以後、卅八首、謫中之作」（此れより以後、卅八首、謫中の作なり）とあることから、彼が太宰府に赴任して間もなく詠んだと見られる。短いながらも、都を離れて愛する家族と別れた悲しみ、西の果ての九州にたどり着いて、過去の栄光と零落した現実との落差に信じられない思いを抱えていることが、如実に表現されているが、注目すべきは結句の「時時 彼の蒼を仰ぐ」である。「時時」は、ここでは現代語の用法ではなく、「いつも」「常に」の意である。また「彼蒼」は天に訴えることを示す語であるので、したがって道真は自らの身の潔白を、常に天に向かつて訴えていることを詠んだといえよう。

玉山は盛唐詩を重んじたので、李白の詩も知っていたであろうが、ここでは妻が夫を訴える内容の「白頭吟」を踏まえたというよりは、道真の「自詠」

#### 四

詩の主旨を汲みとつて、「皦日 青天に訴ふ」と詠んだと見るのが妥当である。玉山のイメージの中の道真は、よこしまな貴族たちに陥れられ、太宰府にて自らの潔白を天に訴え続ける不遇の詩人であったのだ。

玉山の詩の後半は、叙述の場面が過去の回想から江戸時代へと戻る。道真の左遷からおよそ八百年を経た後、玉山の眼前に鎮座するのは厳かな天満宮の佇まいである。天満宮に参詣しつつ、彼は道真の詩人としての名声ははるか後代にまで伝わると予想する。そして、それは左遷という苦難に耐えながらも、志を失わず気高く生きようとした道真の人柄に由来することを「歳寒の松」の喩えを用いて詠み、二首の漢詩を締めくくる。「歳寒の松」とは、『論語』子罕篇に見える「子曰、歳寒、然後知松柏之後彫也」（子曰はく、歳寒くして、然る後に松柏の後れて彫むを知るなり）という一文に由来する。孔子が称賛した常緑の松のような節操のある人柄を、玉山は左遷時代の道真の姿に見て取ったのである。附言すれば、前掲の高木善助の紀行文に、「南館」の近くには「松林」があったことが記されているので、玉山は唐突に松の木を詠んだのではなく、天満宮周辺の環境に触発されての「松色 風煙に鬱たり」の結びであったことがわかる。ともかくも太宰府天満宮の風景は、一人の学者、一人の詩人として肥後熊本藩に仕える玉山にとって、道真に対する敬慕の情をかきたてるものであったといえるだろう。

### 三「太宰府謁菅公祠」二首を用いた学習指導案

ここまでの秋山玉山の「太宰府謁菅公祠」の分析を通じて、第一首・第二首のそれぞれの学習指導案を作成すれば、次の頁にあげるような指導案が考えられる。学習者の理解の度合いによつて、教授方法の在り方は変わるかもしれないが、一つの叩き台として考案するものである。かりに第一首を中学校二年生の国語（もしくは学習内容をやや引き上げて高校一年生の国語総合）、第二首を高校二年生の古典Bの教材と見なし、それぞれ授業二回分として想定するものである。

対象…中学二年生

学習目標…【第一時】秋山玉山の漢詩のつくりを理解し、表現された内容を理解した上で音読できる。

【第二時】情景の叙述から、作者が思い描いた菅原道真の人物像を知ることができる。

【第一時】

1. 本時の学習目標を知る。
2. 作者について紹介した後、菅原道真及び詩題についても解説する。
3. 詩型とその構造を確認し、詩を和訳した後、音読する。
  - ①書き下し文を二句ずつに分ける。
  - ②範読した後、詩の書き下し文を書かせ、教師が和訳を行う。
  - ③各自グループに分かれて音読する。
4. 詩の内容について考える。
  - ①平安時代・江戸時代・現代の年数の隔たりを確認する。
  - ②「陳迹」の表すものを紹介し、天満宮・都府楼・観世音寺の写真を提示した後、それぞれの位置関係を地図で確認する。  
また「悲傷」しているのは誰かを考えさせる。
  - ③「魂」「沢畔」「人」「瀟湘」の指すものを説明し、第五句・第六句の内容をグループで考えさせ、後で発表させる。
  - ④「帝京」の場所、及び「憶ふ」の主語は誰かを考えさせる。
5. 詩の前半四句と後半四句の違いについて、グループ学習を行い、話し合った結果をグループごとに発表する。
6. 詩の内容を考えながら各自音読させた後、数名に朗読させる。
7. 本時のまとめを行う。

【第二時】

1. 前時の内容を復習し、本時の学習目標を知る。
2. 前半四句に踏まえられている内容について理解する。
  - ①「都府楼」と「観音寺」の対句が、菅原道真の「不出門」詩を踏まえていることと、『大鏡』にその詩が引用されていることを確認する（プリントを配布）。
  - ②作者が「不出門」詩に詠まれた状況と、江戸時代の太宰府の風景をどのような気持ちで眺めているかを、高木善助の紀行文を参考にしつつ、グループ学習によって考えさせる。
  - ③後でそれぞれのグループの意見を生徒に発表させる。
3. 後半四句に踏まえられている内容について理解する。
  - ①屈原の故事と菅原道真の和歌を解説し、その上でグループ学習によって、作者が屈原を詩の中に登場させたのは何故か、また作者は道真が梅の花を眺めつつ、どのような気持ちであったと想像したかを話し合わせる。
  - ②各グループで考えた意見を、生徒に発表させる。
4. 作者が太宰府を訪れた時の気持ち、作者が思い描いた道真像を想像しながら皆で音読し、後に数名に朗読させる。
5. 本時のまとめを行う。

対象…高校二年生

学習目標…【第一時】秋山玉山の漢詩の構造を理解し、創作の背景を理解した上で音読できる。

【第二時】情景の叙述から、作者が思い描いた菅原道真の人物像を読み解く。

【第一時】

1. 本時の学習目標を知る。
2. 作者について紹介した上で、漢詩の構造を確認する。
  - ① 漢詩を首聯・頷聯・頸聯・尾聯に分けさせる。
  - ② 押韻している字を調べさせる。
  - ③ 範読を聞かせ、漢詩の書き下し文を書かせる。
  - ④ 頷聯と頸聯の対句の構造を押さえる。
  - ⑤ 漢詩を各自、くり返し音読させる。
3. 作者の漢詩創作の背景を理解する。
  - ① 地図により太宰府の位置を確認する。
  - ② 「太宰府謁菅公祠二首」第一首を参考資料として読み、その上で、天満宮・都府楼・観世音寺の位置を確認する。
  - ③ 太宰府が熊本から長崎街道を通り、江戸へ向かう途中にあることを確認する。
  - ④ 太宰権帥としての菅原道真がどのような境遇であったかを、第一首を参考にしながら考えさせる（グループ学習を行う）。
  - ⑤ 各グループで考えた意見を、生徒に発表させる。
  - ⑥ 道真の境遇をイメージしながら音読するように指示し、後に数名に朗読させる。
4. 本時のまとめを行う。

【第二時】

1. 前時の内容を復習し、本時の学習目標を知る。
2. 範読を行った後、詩の前半四句の情景描写について考える。
  - ① 高木善助の紀行文に基づき、天満宮・都府楼・観世音寺の、江戸時代における状態を知る。
  - ② 頷聯の対句に見える「浮雲」「皁日」の意味を辞書で調べる。
  - ③ 「浮雲」「皁日」がそれぞれ象徴するものを考えて、頷聯の対句を読み解く。
3. 詩の後半四句の情景描写について考える。
  - ① 「廟貌」「詩名」の対句表現から、菅原道真という漢詩人の存在が、時代を超えて久しく伝わることについて知る。
  - ② 「歳寒」の意味を辞書で確認した後、これが『論語』に基づくことを紹介し、擬人化された松が道真の喩えであることに気づかせる。また辞書で「鬱」字が「鬱蒼」と同様の意味であることを確認して、最終句の情景を思い描かせる。
4. 詩の全文を通して、作者がイメージする道真像を読み解く。
  - ① 作品中の風景描写と玉山が思い描いた道真像の関係についてグループ学習を行い、グループごとに発表させる。
  - ② 詩の内容を味わいつつ、気持ちをこめて音読させる。
5. 本時のまとめを行う。

中学校二年生に「太宰府謁菅公祠」第一首はやや難しいかもしれない。しかし、この学年の国語教科書には概ね杜甫の「春望」が取り上げられる。五律の詩型が共通し、また複雑な典拠を使用しているわけではないので、屈原の故事を併せて紹介すれば、比較的に素直に読み解くことができるだろう。「飛梅伝説」については、時間が許せば紹介した方が中学生にも興味を起させることができるのではないか。

第二首の読解に際しては、「古詩十九首」第一首に由来する「浮雲」と、『論語』子罕篇に由来する「歳寒の松」は必須の説明事項であり、道真の「自詠」詩も原文と書き下し文を紹介した方が作品に対する理解が深まるのではないかと考える。二首の詩に共通するまとめとしては、天満宮という名所旧跡を訪れた玉山が、嘗てそこに住んでいた菅原道真に対してどのような思いを馳せたかを、各自で自由に想像させ、また現代社会に生きる我々が日本の歴史遺跡を訪れた時に、玉山のように先人に対して共感なり感慨なりを抱くことができるかどうかを、生徒たちに考えてもらうということが想定される。

現行の「学習指導要領」の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」には、中学校・高等学校の校種を問わず、古典に親しむことが目標とされている。熊本の詩人である秋山玉山の「太宰府謁菅公祠」二首は、平安時代を代表する漢詩人である菅原道真の事跡と相俟って、上記の目標を達成するのに十分な古典教材であることを、筆者は信じてやまない。

## おわりに

熊本では、中国と関わる文物は必ずしも多くはないかもしれないが、それでも古典教材と関連させて学習できるものも見られる。たとえば、熊本城には有名な「王昭君の間」が設けられており、高等学校国語総合の「王昭君」(『西京雜記』)を授業で扱う際に副教材的に紹介できる。また、水前寺公園成趣園の「古今伝授の間」には「竹林七賢」の襖絵が描かれており、やはり国語総合に採用されることのある「王戎不取李」(『世説新語』)を教授する際に併せて紹介することができる。熊本市外では、天草市新和町に楊貴妃漂着伝説があり、伝説の真偽は別として、古典Bの白居易「長恨歌」と関連させて紹介することができる。日本の伝統文化が中国の歴史や故事とどのように関わるかを紹介する話の枕として、熊本に現存する文物の果たす役割は決して小さくはないはずである。

これらに関連して考えるのだが、国語教材として教えることになっているからと、いたずらに漢詩・漢文を教授しても、生徒たちは自分たちとは関係の無い外国の文学作品を読まされていりと思わないかもしれない。その一方で、受験勉強のために仕方なく学習する生徒も見られることであろう。

だが、そもそも国語の一環として漢文を学ぶのは、我々の先人たちが長きにわたって中国の歴史や文化を受容し、漢詩や漢文を歴史の叙述や、自己の考えや価値観を表す手段として用いたからである。現行の「学習指導要領」に、高等学校国語・古典Aの目標として、「古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深め、生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」と述べられ、また古典Bの目標として、「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる」と説かれているのは、古文・漢文を問わず、現代を生きる日本人として、まずは先人のものの見方や考え方にふれてこれに親しみ、日本の貴重な伝統文化の価値を知り、後世へと伝えていく役割を一人一人に自覚させるためなのではないかと考える。昨今、すぐに役に立つか立たないか、という狭い見識で学問の価値を計ろうとする風潮が強まっているように感じる。このような時にこそ、『莊子』に説かれる「無用の用」が語られなければならないであろう。

## 注

1 秋山玉山の伝記としては、徳田武『江戸詩人伝』(ベリかん社、一九八六年)所収「秋山玉山」がある。また徳田氏には『梁田蛻巖・秋山玉山』(『江戸詩人選集』第二巻、岩波書店、一九九二年)の専著があり、玉山の特色ある作品について注釈・解説がなされている。玉山の詩風についての研究には、松下忠『江戸時代の詩風詩論』(清の詩論とその撰取)(明治書院、一九六九年)、遠山加奈「時習館の学風と秋山玉山」(秋山玉山と徂徠学派との関連を中心として)、『二松学舎大学人文論叢』第三九輯、一九八八年)などがある。

2 高木善助著、東條広光編『大坂商人旅日記 薩陽紀行』(文政・天保期の南九州への旅)、『鹿児島学術文化出版』(二〇一六年)六六～六八頁、および一七四～一七五頁の画帖を参照。画帖には「米ノ山越ハ宰府へ参詣ノ分レ道ナリ。宰府へ三里」とあり、筑前内野宿附近から太宰府へ参詣するための分かれ道があったことがわかる。



- 3 菅原道真「不出門」詩および後掲「自詠」詩の原文は、国立公文書館内閣文庫蔵『菅家後草』（昌平坂学問所旧蔵、貞享四年（一六八七）刊）による。ただし引用の際に、旧字は通行の字体に改め、踊り字も改めて実字を重ねた。該詩の閲覧にあたっては、同館デジタルアーカイブ（左記URL）を使用した。  
<https://www.digitalarchives.go.jp/DAS/meta/istPhoto?LANG=default&ID=F10000000000004193&ID=&TYPE=&NO=>
- 4 例えば、中野幸一編『古典B』・同氏編『探求古典B 漢文編』（共に桐原書店、平成三〇年度）では菅原道真「不出門」は日本漢詩教材として選ばれている。文部科学省編「平成三〇年度使用高等学校（第一部）教科書編集趣意書 国語（古典B）編」（平成二九年、左記URL）を参考した。  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/05/18/1367021\\_6\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/18/1367021_6_1.pdf)
- 5 この詩が白居易の影響下に作られたものであることは『大鏡』にも言及があり、また近年、二つの「不出門」詩の比較考察を行った研究として、静永健「家から出ない日の詩歌」（『アジア遊学』第一一〇号、「特集：アジアの心と身体」、勉誠出版、二〇〇八年、後に同氏『漢籍伝来―白楽天の詩歌と日本―』（勉誠出版、二〇一〇年）に収録）がある。
- 6 『拾遺集』の本文は、小町谷照彦校注『拾遺和歌集』卷十六「雑春」（『新日本古典文学大系』第七卷、岩波書店、一九九〇年）二八八頁によった。なお同集においては作者を「よみ人知らず」とするが、『大鏡』左大臣時平伝などにより、菅原道真が作者とされていることは周知のとおりである。
- 7 「古詩十九首」および李善注の本文は、『文選』（胡刻本、藝文印書館、一九九八年）による。
- 8 李白詩の原文は、『李太白文集』（『唐代研究のしおり第九 李白の作品 資料編』、静嘉堂文庫蔵本の影印、同朋舎、一九八五年）による。
- 9 「彼蒼」は「蒼天」を指し、『詩経』秦風・黃鳥の「彼蒼者天、殲我良人」（彼の蒼さは天なり、我が良き人を殲す）に基づく。鄭玄の箋に、「言彼蒼者天、愬之」（彼の蒼さは天と言ふは、之に愬ふるなり）とあり、青空を仰いで天に訴える時に用いられる。